

自著と  
その周辺

## 死生学のフィールド

編著者：石丸昌彦・山崎浩司

放送大学教育振興会

276ページ

2018年3月20日発行

定価：2,400円＋税

本書は、同名の放送大学ラジオ科目のテキストです。編著者を含む6名の執筆者の専門は、精神医学、社会学、臨床倫理学、悲嘆学、心理学／教育学、民俗学と多様です。この多様性は死生学という学問の学際性に由来します。死生学とは、端的に言えば、死に関する様々な現象の考究をとおして、今の私たちの生を問い直す学問です。既存の1つの学問分野だけでは、死生にまつわる広範な現象をカバーすることも、多角的に考究することもできません。

本書を編むにあたって私が特に意識したのは、死生学のフィールドが私たちの日常のそこここにある、人生のあらゆる段階で展開しうることを示すことでした。一般的に、死は非日常に属する事象であって、人生の最終段階に出現するものと捉えられる傾向があります。しかし、「死生」という言葉が示すとおり、日常において死は常に生と隣り合わせにあります。それが、自分の死、大切な人の死、あるいは他者の死として立ち現れるのかの違いはあっても、やはり死は私たちの日常とともにある普遍的な事象です。

また、周産期医療の現場で見られるように、生まれてからすぐに、あるいは見方によっては生まれる前に、死が訪れることもあります。つまり、死は老いの先にあるいのちの終わりの段階だけでなく、いのちの始まりの段階にも現れることがあり、死生学はこうした現象も考究の射程に収めています。

今日、死生学がカバーする諸問題を日常の出来事として最も実感しているのは、臨床実践に携わる医療者でしょう。この意味で、死生学は実践性を特徴とする学問であるとも言えます。実際、日本で死生学の発展を牽引してきたのは臨床実践家たちであり、それを反映するように、わが国の主要な死生学の2つの学会（日本臨床死生学会、日本死の臨床研究会）には、ともに「臨床」という語が含まれています。そして、本書でも全体の3分の1以上が臨床実践にまつわる死生の問題を、直接的ないし間接的に取り上げています。

しかし、死生学の諸問題は臨床に限定されるものではありません。現代日本の一般的な社会状況に視野を広げると、高齢者を中心に自らの死を意識した「終活」への関心の高まりがある一方で、子どもや若者がいのちの終わりや始まりを、間近に目にしたりじっくりと考えたりする機会はほとんどないことが見えてきます。

こうした状況に対して、本書でも取り上げているデス・エデュケーションの展開が1970年代後半から見られます。さらに昨今は、公的な教育の場ではなく、カフェのような日常的な場で死生についてオープンかつ自由に語り合う、参加型でしばしば多世代型なデス・カフェが各地で開かれています。死生学は、これらデス・エデュケーションやデス・カフェの展開を研究するだけでなく、牽引する役割も担っています。

本書では、戦争についても取り上げています。大規模な人為的暴力の典型である戦争は、大量の死やそのほかの深い喪失を人間にもたらし、生き残った者に、そして後世の人々に、個人と集団双方の次元で、人間として生きる・死ぬとはどういうことかという問いを突きつけます。第2次世界大戦の当事国であった日本に生きる私たちは、大規模な暴力をふるう渦中に身を置くことになった過去の現実を見つめ、上記の問いと自分なりに、自分たちなりに、向きあっていく必要があります。死生学は、このように、私たちの実存を問う学問でもあるのです。

総括すると、死生学は、死にまつわる多様な現象の考究を通して現代の私たちの生を捉えなおすことを目指す、学際的で、実践的で、実存的な学問である、と言えます。その特徴は、以下に示す本書の目次からもおわかりいただけると思います。

1. 死生学のフィールド
2. 死生・宗教・スピリチュアリティ
3. 日本人の死生観
4. マスメディアで死生について考える
5. 選択される命
6. 流産・死産をめぐる胎児観
7. 老いと病と死：フレイルの知見を臨床に活かす
8. いのちの臨床倫理：高齢者における人工的水分・栄養補給法の問題を中心に
9. エンドオブライフ・ケア：尊厳ある最期とは
10. 喪失と悲嘆
11. グリーフケア
12. デス・エデュケーション
13. 自死遺族・遺児支援
14. 戦争と死、喪失
15. 死生学とコミュニティ

なお、同じく放送大学のテキストで、執筆陣は社会学者である山崎以外全員が医療者であった『死生学入門』（2014年）と、本書『死生学のフィールド』を併せてお読みいただくと、死生に関する同じテーマを扱っていても、医療系と人文社会科学系の研究者で異なる重点化やアプローチが認められ、視野がますます広がることと思います。よろしければ両書ともご覧ください。

(信州大学医学部保健学科 山崎浩司)

